

住環境という人生の舞台をデザインしよう

5つの手法で最大の効果を

住環境整備は、その人の人生の舞台をどうデザインするかがポイントだ。そのなかの住宅改修は、なるべく最小限の介入で最大効果を生み出すことが大切であり、5つの手法がある。さらに今回は、コロナ禍での新しい退院支援の方法についても、ご紹介したい。

執筆 ▶ **久保田 好正** ● 株式会社新新社 代表取締役
提案家 作業療法士 二級建築士



【主役は疾患ではなく「その人」】

私は「パーキンソン病の住宅改修」は存在しないと思う。もちろん、疾患による配慮すべき特性はある。しかし、Aさん（パーキンソン病）の住宅改修であり、個人名が主語になることを勘違いしてはいけない。疾患名を優先するならば、すべてバリアフリーにすればいい。しかし、それでは一人ひとり違う本来の住まいとはいえないのではないだろうか。

世界的建築家のル・コルビュジエは「家は、暮らしの宝石箱でなければならない」という言葉を残している。家とは、住む人の価値観が反映される人生の舞台だ。それを病気になったから、障害があるから、歳をとったからと誰でも同じで均質な場にしていはいはずがない。

今回、住環境整備の総論として、「その人の住まいをどうデザインするか」を個別支援と間接支援に分けて事例をあげながら紹介する。

【住宅改修と住環境整備、個別支援と間接支援】

厚生労働省では、住宅改修とは「在宅介護を重視し、高齢者の自立を支援する観点から、福祉用具導入の際必要となる段差の解消や手すりの設置などの住宅改修を、介護給付の対象とする」こととしており、介護保険法での用語である。

住環境整備の決まった定義は見当たらないが、介護保険による住宅改修、建築やインテリア、福祉用具、そこに

住む人のライフスタイルを総合的に整えるものだ。

次に、一人ひとりの方への個別支援、制度や仕組みをつくる間接支援。どちらも住環境整備で必要な支援者の視点とアプローチである。

【住宅改修5つの作法 最小限で最大効果を目指す】

住宅改修の現場では、ご本人のニーズや身体機能・生活動作、ご家族のニーズと介護力、住環境など幅広く総合的にアセスメントする必要がある。ときにご本人とご家族のニーズはすれ違い、どちらを優先すべきか迷うこともある。また、ご本人の身体機能は改善することも、低下することもあり得る。さらにご家族の介護力も変わる。そのような不確定要素があるなかで、どんな視点でどのような住宅改修のプランを考えたらいいだろうか。

住環境整備の作法

最小限で最大効果を目指す

- 1) **今あるもので工夫**
レイアウトの変更、高さ調節、整理整頓など
- 2) **体の機能向上**
廃用症候群の改善。自主的な運動。年齢よりも習慣と好き嫌いで検討。
- 3) **福祉用具の活用**
調整、変更、新規導入。気軽に試せるのが強み。
- 4) **住宅改修の施工**
痕跡を頼りに、できるだけシンプルに。退院時は二期工事が基本。
- 5) **サービスの利用**
介助量や当事者の希望を大切に。